

## 若手研究者育成と学会誌 「Microscopy」の強化

白 倉 治 郎

名古屋大学 超高压電子顕微鏡施設



最近気になることは、日本の学界において研究分野の diversity (多様性) が他国に比べ小さいこと、若手研究者の育成が不十分なこと、そして、研究を発信する国際ジャーナルが未成熟なことです。これらは日本が知的科学技術立国を目指す上で看過できない点です。これらは一学会で解決できることではありません

が、意識を共有することは重要です。また、日本顕微鏡学会としてできることは実行しなければなりません。それらは若手研究者の育成と国際雑誌である「Microscopy」の強化だと思えます。若手顕微鏡科学研究者の育成は重要で、急務であります。これまでは研究活動に興味を持ってもらうことを目的に若手研究会の開催や大学院生の参加費を優遇してきましたが、これらの効果はまだわかりません。現実はかなり厳しく、生涯設計が立たないという理由で、大学に残るより一流企業への就職を選ぶ学生がかなりおります。特に生物系では学位取得後の就職は狭き門となります。問題は博士研究員(特任助教を含む)の将来です。日本では学位取得後すぐに助教になる人もいるので、厳密には博士研究員はキャリアパスの一部には組み込まれていないこととなります。最近では、助教でも任期があり、また、その先の准教授、教授もポイント制で定員化されていない大学も多く、研究者として生涯設計が出来ないのが現状です。国の未来を背負って立つ優秀な若手が将来の見通しが立たないというのは誠に遺憾なことです。これは学会が考える問題ではないと言う人もいそうですが、若手研究者育成問題は様々な場面で、様々な方面から文科省やしかるべき実行機関に働きかけるべきです。博士研究員の置かれている現状を調べ、その実態を公表する。顕微鏡学会には企業の方も多いため、学位取得者の積極的雇用を依頼する。顕微鏡科学分野の教員を募集する際にはインタビューの場として学術講演会などを利用してもらう(米国の学会では行われている)。また、顕微鏡科学の多様性を生むためにも、中堅、若手の産学官共同研究を学会という場を利用して推進する(JASIS, BioJapan, ナノテク展ではこれに似たことが行われている)。このほか研究者の育成には多数の問題が存在します。学会内に若手研究者育成を扱う常設の

委員会を設置することを提案します。

次に研究発表の場である国際科学雑誌(journal)についてです。一般に、日本で出版される科学雑誌の多くは国際認知度が低く、impact factorも4を超える高引用率の雑誌は殆ど無いのが現状です。日本で行われた研究を日本の雑誌を通じて世界に発信するのが理想ですが、画期的な実験結果を含む研究は海外の雑誌へ投稿するというのが現状です。日本顕微鏡学会は「Microscopy」という国際雑誌を持っております。この雑誌は材料系、生物系の基礎、応用研究から試料の preparation や装置の instrumentation などの論文まで扱うアジアで唯一の国際性の高い雑誌で、その発展が期待されます。競合誌は Microscopy & Microanalysis, Ultramicroscopy, Journal of Microscopy などですが、未だそれほど差を付けられているわけではありません。欧米の雑誌への投稿と比較して、気がついた重要な点は査読過程の的確性です。Microscopy では editorial board に材料系、生物系合わせて 29 名の executive editor (handling editor の候補) がおります。一方、著名な雑誌では editorial board は 200 名を超えております。これは投稿論文の分野が多岐におよぶため、適切な handling editor を選ぶ必要があるからです。実は handling editor の善し悪しで、review 過程の質が決まります。handling editor は査読者を選び、査読結果を基に論文の採否を決める。単なる取扱者ではなく採択権を持った第三の査読者でもあります。必ずしも査読者が正しいわけではないので、査読結果を吟味し、改訂の方向を著者に告げることになります。私の経験では査読者のコメントの内どれが重要かを指摘する editor や、論文の構成について具体的な変更を示唆してくれる editor もいました。配慮ある editing は handling editor と著者の研究分野が多少とも重なっていないと不可能です。editorial board (executive editor) が学会員である必要はないのでグローバルな視野から、材料系、生物系それぞれ 50 名程度に拡大する必要性を感じます。そして、レビュー過程のガイドラインを作り、editorial board に配布すれば、質の高い査読過程を維持できるのではと考えております。科学技術の発展著しいお隣中国では国際認知度の高い雑誌が出来つつありますので、老婆心ながら書かせていただきました。

白倉治郎 (Jiro Usukura)

1981年 東京大学 大学院 医学研究科 博士課程修了(医学博士)、1981年 東京大学 医学部 助手、1988年 名古屋大学 医学部 助教授、2006年 名古屋大学 先端技術共同研究センター 教授(2008年エコトピア科学研究所に合併)、2013年 名古屋大学 名誉教授、特任教授 2014年 理学研究科 招聘研究員、2019年 未来材料・システム研究所 特任教授、2021年 名古屋大学 名誉教授、東京大学医科学研究所客員研究員 現在に至る。1994年 瀬藤賞受賞、2000年 理事、2002年 監事、2011年 関西支部長